須田記念

視覚の現場

2022年3月 第6号

特集

ギャラリーの役割

——これまでとこれから

目次

第６号の発刊にあたって／原田平作 …… 2
表紙解説／岸　文和・原田平作 …… 4

須田国太郎論

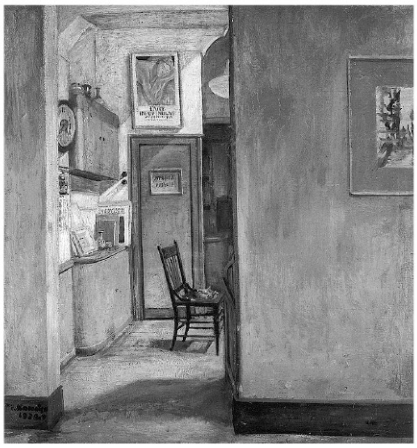
須田国太郎の模写――ヴェネツィア派の発展継承／深谷訓子 …… 5

カラー図版：誌上再現／須田国太郎第１回個展／1932年 東京銀座・資生堂ギャラリー／深谷訓子 … 13

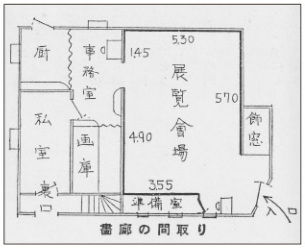
特集　ギャラリーの役割――これまでとこれから

特集「ギャラリーの役割――これまでとこれから」／岸　文和 …… 22
日本のアートワールドにおける作品展示の位相／竹中悠美 …… 23
芸術作品の美的／芸術的価値／杉山卓史 …… 26
日本のコマーシャルギャラリーの現在とその周辺／加藤義夫 …… 29
近代大阪と〈画廊／ギャラリー〉／橋爪節也 …… 31
関西の画廊の変遷――　一九九〇年代から現在まで／小吹隆文 …… 34
ギャラリーの顧客について／中塚宏行 …… 36
アート市場とコレクターの変容――購入動機とアート情報提供についての考察／大西浩志 39
美術館活動とギャラリー／出原　均 …… 42
㈱東京美術倶楽部、アートの価格、そしてカタログ・レゾネ／宮本高明 …… 45
明日の制作の糧を齎し、需要を喚起する作家経営ギャラリーの役割――岡山県の現況／上薗四郎 … 48
無形文化財の保護とギャラリー／生田ゆき …… 51
東海圏における工芸家と画廊の密なる関係／正村美里 …… 56
若手アーティストの社会的窓口としてのギャラリー――京都の現代美術ギャラリーの事例から／はが みちこ …… 59
美術教育とギャラリー・スペース――女子美アートミュージアムの事例を中心に／三谷理華 … 62
美術担当記者にとってのギャラリー／岸　桂子 …… 65
変容するギャラリーと美術館との関係／島　敦彦 …… 68
アメリカ、アート・ギャラリーの興亡、もしくは「291」残影／大坪健二 …… 71

SUMMARY／各執筆者（川上幸子訳） …… 77
財団からのお知らせ …… 78
編集後記／岸　文和 …… 82



（全図）



「画廊の間取り」日本洋画商協同組合編『日本洋画商史』1985年（昭和60）美術出版社

表紙解説・表

小松益喜《朝の大塚画廊》（表紙は部分）

1938年（昭和13）　油彩・カンヴァス　96.0×91.5㎝
第６回新制作展出品　西宮市大谷記念美術館蔵

「異人館の画家」として広く知られている小松益喜（こまつますき）（1904-2002）が描く朝の画廊。神戸・元町の鯉川筋にあった３階建て煉瓦造り洋館の１階に、1930年から1943年まで、神戸初の「画廊」という名の画廊（ギャラリー）があった。小松自身も、異人館を描き始めた30歳の時に個展を開いたこともある画廊の「朝」。時計の針が示しているのは７時25分（４時40分？）頃で、静まりかえった「展覧会場」の奥にある「事務室」の電灯だけが煌々と灯っている。今は姿の見えない画廊の世話役は、大塚銀次郎（1892-1968）という大阪毎日の元新聞記者。多くの画家や図案家、写真家たちに、作品を発表し、相互に交流する場を、また、後援会の会員に、積み立てた会費で作品を購入する場を提供した。「私室」のドアの上に掲げられているのは、「L'ART INDÉPENDENT AU PETIT PALAIS」とあるように、1937年、パリのプティ・パレで開催された「アンデパンダン展」のために、ムルロ工房が、マティス（Henri Matisse, 1869-1954）の《夢》（油彩・カンヴァス、1935年）をモチーフにして制作したポスター（リトグラフ）。画廊での展覧会は、美術を愛する者たちが、パリの美術界を見据えながら、夜が更けるのも忘れてたたかわせた熱い議論の結果である。

（岸　文和）

表紙解説・裏

須田国太郎撮影《水辺の市街風景》

1919-1923年（大正８-12）　写真

須田国太郎が撮った写真　洋画家として、またスペイン美術を中心とした西洋美術史家としても知られる須田國太郎に、自身が撮ったかなり多くの写真があることが知られるようになってきた。これまでにも例えば上原美術館の斎藤陽介氏などが注目し、「研究ノート、須田国太郎の写真：滞欧期を中心に」（『研究紀要』第43号、静岡県博物館協会、令和元年度）などを発表しているが、それは99点であるのに対し、広島県呉市にある蘭島閣美術館が所蔵するかなりの数の写真、それに須田家に保存されたりしているこれまた相当数の写真（カメラも遺っていた）などを合わせると、結構大きな数になるようである。

ここに紹介するものもそれらのうちの一枚で、斎藤氏によって「水辺の市街風景」と題されたものであるが、全体はやや高めの処から見られた俯瞰構図で、左に大きな建物があり、右にも壁面がちらっと見え、中央に階段があってそこに一人の女性と猫がいて、その奥は草地の向こうが海になっている。中心があって遠近が意識され、若干の生活感が出るように構成されており、思いなしか後年の須田の絵画が偲ばれると言いたい感じになっている。

こんなことを言っていると須田を理解するためには、最近認識が高まってきた大阪大学などに蔵されている多くの能・狂言デッサンに加えて、遺されたこれらの写真もまた総合的に考察する必要があるように思われてくる。（原田平作）